

松江文化情報誌

# 湖都松江

《特集》

松江開府400年

襲行列 松江城を国宝にしよう



vol. 18



# 鑿と私

松江で生を受けた人が初めて聞く音は、鑿行列の鑿の音  
太鼓より太く重く、胴を振わせ魂にまで響きわたり、それは心の音となる  
松江に住み始めた人も、鑿の音を聞く回を重ね、次第にこの町の人になる

## 北堀町の鑿 溝口善兵衛

(島根県知事)

松江に住むようになって初めての年の秋、

夜の会合が終わり、いい気分の家までの道をぶらぶら歩いているとき、顔見知りのIさんに声をかけられた。「こっちへきて鑿を打ってみませんか」。これが、私と鑿との最初の出会いだった。Iさんは北堀橋の北詰のところ町内の人たちと鑿の練習中であつた。後で聞くと、Iさんは松江の鑿行列を保存する会の会長であつた。

このご縁で時々、練習や十月の鑿行列の前夜祭などに勝手参加をし、その後の飲み会などにも入れてもらつたりして、準会員

のような扱いをしていただいている。

私は生来、音痴で音楽は聴くのは好きだが、歌つたり、楽器は全くダメ。鑿は何度も打っているが、いつもみんなのリズムから外れてしまう。私の打ち方は、耳で合わせるというよりも、他の人の手の動きを目で追つて合わせようとしているからだ。そんな私のために親切な北堀町の人たちは、横に並んだり正面に立つたりして、大きな身振りで手本を見せて下さる。本当は体で覚えて腕などが無意識に動かなければいけないのだろう。

しかしそれでも、必死で合わせようと気合を入れ、体を動かして大きな音を出すのは気持ちがいい。普段使わない筋肉や神経に刺激を与えるからだろう。また、大きな鑿から発せられる重い音の響きには、人の拍動のリズムに合わせるかのような何ともいえない調子があつて、それが心を落ち着かせてくれるのだろう。

打つているときも楽しいが、練習の後もまたいい。練習が終わると、近所のメンバーの家に子供も大人も皆、集まつて、互いに持ち寄つた料理などを囲んで、お茶やお酒を飲んだりして、この子は誰それさんの子供だとか、この料理はこの人が名人だなどと歓談をする。親子三代で鑿行列に参加している家もある。町内に住む県職員や県で働く外国人職員がいることもある。町外

や市外から参加されている人もいる。参加者の輪も近年、拡がっているようだ。

藝のような伝統文化は、一定の人の集団の中で、個々の人の手や体の中に共通の動作などの形で蓄積され、高齢者が退かれても新しい人が入ってきて、一定の集団の規模が維持されることによって継承されていくということがよくわかる。そのためには、集団に参加することが若い新入者に楽しくなければならぬ。北堀町の藝では、顔見知りや仲のよい地域の人は、楽しさを作

りだす仕方もよく受け継いでおられるようだ。

私は島根の良さについて語るとき、「豊かな自然や伝統、文化」に加えて、いつも「温かい地域社会と人間関係がここ（島根）にはある」と話している。これは、島根県内各地を回ってみて感じたことなのだが、そうした地域社会が、松江ほどの都市の中心部にも残っているということは大きな驚きだ。

北堀町の藝に参加して、伝統文化の継承の実際を目の当たりにしたような気がする。